

1 学校教育目標 夢と誇りをもち、自己実現を目指す生徒の育成 学校スローガン:みぎき、ささえ、つながる 生徒スローガン:みんなでめざそう NAT! (N=日本一 A=アクティブな T=中学校)	2 本年度の重点目標 ①『活用力』を高める指導方法の研究と実践 ～効果的な言語活動を取り入れ、「学び合い」を重視した授業実践を通して～ ② 人権教育を中核に据えた教育活動の実践 ～「仲間づくり」「環境づくり」の実践と「特別支援教育等」の充実を通して～ ③「地域とともにある学校づくり」の推進 ～地域貢献活動(NATプロジェクト等)を通して～
---	---

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 『活用力』を高める指導方法の研究と実践 ～効果的な言語活動を取り入れ、「学び合い」を重視した授業実践を通して～

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	NAT(西中)型授業の実践	◇言語活動を通した学び合いを取り入れることにより育てたい力を伸ばす。	◇授業研究会の中で、言語活動を通した学び合いを取り入れることによって、生徒が『活用力』力を身につけることができるかを確認する。	B	◎授業の中で、説明したり、教えあったりして自分の考えを述べる機会を増やすことによって、生徒たちも少しずつ慣れてきている。 ▼学びたい表現したいと思える課題に工夫する必要がある。	◎積み上げ式の学習方法も必要だが、課題を先に与え、課題を解決するために学ぶ必要があると感じさせるよう、課題の出し方を工夫する。この学びが学習をさらに加速させることができるはずである。
		全職員による研究授業の実践	◇言語活動を通した学び合いを意識した研究授業を全職員で行う。	◇言語活動構想シートを活用し、各研究部会で事前に研究会を行う。 ◇研究授業の前に、指導案検討会等を行い、よりよい授業づくりを目指す。	A	◎全職員が言語活動をテーマにした研究授業を行うことができた。 ◎本校独自の構想シートを使用することによって、テーマが明確な授業構成となった。 ▼活用力向上の研究指定が今年度で終了するので、次年度からの取り組みどのようにしていくか検討する必要がある。	◎今後とも研究授業を計画・立案しなければならない。 ◎指導案・言語活動構想シートの更なる改善を行っていく。
		基本的学習習慣と学習規律の向上	◇家庭学習時間に2時間以上取り組む生徒の割合を70%以上にする。	◇月1回程度の家庭学習時間調査達成度調査を行う。 ◇「家庭学習ルール」を改訂し、活用方法を検討して用いる。 ◇「はなまる連絡帳」を活用し、保護者との連携を図る。	B	◎家庭学習の充実のためのアンケートや学習時間調査などを実施し、生徒の実態把握ができた。 ▼家庭学習時間2時間以上に取り組む生徒の割合70%は達成できなかった。3年生の後期のみ、平均2時間程度学習していた。 ▼忘れ物をしたり提出物の期限を守れなかったりする生徒が固定化しており、こまめに提出を促す声かけが必要であった。	◎家庭学習アンケート、学習時間調査等は継続して実施し、集計分析結果を学活や道徳の授業で活用するなど、生徒や保護者に対する発信をしながら家庭との連携を図る。 ◎全学年2時間の学習目標時間を浸透させるため、学級での生徒に対する指導だけでなく、保護者にも周知をはかる。 ◎家庭学習時間とネットやゲームなどのメディア時間との関係を分析する。
		学力・学習状況調査結果の分析と有効活用	◇県調査・全国調査において県平均を上回らせる。	◇『活用力』を高める授業を推進する。 ◇学習習慣の定着を図る取り組みを継続的に行う。 ◇「仲間の約束」を生かし話し合いの場を取り入れた授業を行う。	B	◎1年社会科の「思考・判断・表現」、2年数学科の「技能」が県平均を大きく上回り、2教科とも全体正答率も県平均を上回った。 ◎2年理科の活用力問題の正答率が県平均を上回り、4月調査からの伸びが見られる。 ▼8教科で県平均を下回り、基礎・基本を含め、思考力等を高める対策が必要である。	◎4月調査を領域や問題ごとに細かく分析し、これまでの成果や課題となる点をあげ、具体的な対策を考え、実行する。 ◎12月調査の結果を受け、4月調査からの具体的な対策が有効であったかを検証し、改善策を図る。 ◎「主体的・対話的で深い学び合い」を実践するため、学習規律の遵守の徹底を図る。
		教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	◇ICTに関する職員研修を必要に応じて実施する。 ◇全教科においてICTを活用した授業を場面に応じて適宜、実施する。	◇ICT活用に必要な環境を整える。(システム管理の徹底) ◇ICT教育支援員を積極的に活用する。	A	◎ほぼ全職員が授業でICTを頻りに活用している。 ◎生徒へのアンケートにおいても「わかりやすい授業のためにICT活用している」と答える生徒が多く好評である。 ▼タブレット端末機器の利用の充実が望まれる。	◎今後ともわかりやすい授業のためにICTの活用を推進すべく、職員研修や情報提供を更に行っていく。 ◎タブレット端末に関しては、普通学級はもちろん、特別支援学級の学習活動で有効に活用していく。

② 人権教育を中核に据えた教育活動の実践 ～「仲間づくり」「環境づくり」の実践と「特別支援教育等」の充実を通して～

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	学年・学級活動の充実	◇「仲間の約束」の全項目について「守れている」「まあまあ守れている」生徒の割合を90%以上にする。	◇自分の思いを伝えあう場を工夫した授業を行う。 ◇Q-Uテストを活用し、学級の生徒理解に努め、生徒各々の自己理解を促す。	B	◎「仲間の約束」を意識させるような手立てを盛り込んだ授業が増えた。「できていない」生徒が減った。 ▼アンケート結果、仲間の約束によって「発言しやすい」と思わない生徒が増えている。	◎「仲間の約束」を意識させる授業を継続する。 ◎節目ごとに「仲間の約束」について、学校全体で共通理解を図る。 ◎Q-Uテストの分析に力を入れる。 ◎「ふわふわ言葉」の授業回数を増やす。
		人権同和教育の充実	◇「ふわふわ言葉」を心がけている生徒を70%以上にする。	◇総務部の活動でアンケート等を実施し、意識を高める。 ◇学校教育活動全体、学活や道徳の授業の充実によって推進する。	B	◎計画通り、生徒によるアンケートを実施することで、生徒の意識を高めることができた。 ▼生徒の配慮を欠いた発言を少なくするために、「ふわふわ言葉」の推進をもっと強化しなければならない。 ▼人権・同和教育、特に部活動問題学習をもっと組織的に取り組む体制を再構築しなければならない。	◎生徒によるアンケートを実施した後の情報を共有化する。 ◎「ふわふわ言葉」についての道徳指導の強化する。 ◎部活動問題学習についての職員研修の実施と指導案作成及び授業参観を全職員で行う。
		特別支援教育の充実	◇支援を要するすべての生徒について個別に支援計画を作成し、それを活用する。	◇アンケートや教育相談による情報の収集を行う。 ◇特別支援教育委員会を適宜開催し、学校全体での支援体制を構築する。	B	◎支援を要する生徒を把握し、その対応について、保護者や担任、SC等と連携してきめ細かく行うことができた。 ▼要支援生徒の早期発見と支援のために特別支援教育委員会を機能させる必要がある。	◎要支援生徒の有効な支援の在り方について、共通理解を図る機会を多く設定するとともに、関係機関や専門家等を活用するなど、特別支援教育委員会の組織を見直し強化する。
	●いじめの問題への対応	情報モラル教育の実践	◇情報モラル教室を実施する。 ◇各教科の授業で情報モラルの視点を持った授業を行う。	◇スマートフォンやPCの使い方、その他情報機器を利用する際の危険性など具体的な事例をあげた内容にする。 ◇技術科や道徳学活で情報モラルの授業を行うだけでなく、各教科においても情報モラルに配慮した授業を行い、生徒の模範となる。	B	◎本年度は、集会で生徒対象に「情報モラル講座」を行い、生徒は身近な問題・深刻な問題として考えることができた。 ▼実際本年度もSNSを介したトラブルが生徒間に発生している。生徒の使用も増加しており、今後も継続して情報モラル教育を推進していかなければならない。	◎技術科教育だけでなく、全職員で道徳・学活・朝の会等での会などで、積極的に情報モラルについて取り扱う。保護者にも携帯端末の所持や使い方について理解を求めなければならない。
		生徒会による「いじめ追放」の意識向上	◇クラスに「安心できる」「楽しいと思える」生徒の割合を80%以上にする。	◇生徒会が中心となり集会などの時間に「仲良く宣言」を言う。 ◇学校行事等の中において、クラスでの協力が実感できる内容を取り入れる。	B	◎生徒会活動では「仲間の約束」を意識する活動ができた。 ▼学校・クラスが「安心できる」と答えた生徒は90%を超えているが、日常的な人間トラブルも発生している。今後も引き続き注視する必要がある。	◎いじめ追放のために生徒自身が積極的に取り組めるように、生徒会を中心に「仲間の約束」や「なかよし宣言」を意識した活動を行う。
		部活動の充実	◇社会体育を含めた部活動入部率を95%以上にし、充実した部活動の運営を行う。	◇顧問・外部指導者・保護者との連携を密にし、生徒個々に応じたきめ細やかな指導を図る。	B	◎社会体育を含めた部活動入部率は、93%であった。 ◎部活動に意欲的に取り組んでいると答えた生徒は、95%であった。	◎教員の能力や資質を熟慮した部活動顧問の設定 ◎部活動顧問の指導内容の量から質への転換を行う。 ◎部活動休養日設定の徹底を図る。
		●健康・体づくり	食育の推進	◇学校・家庭・地域の連携を深め、給食を通した食に関する指導を充実させ、食の自己管理能力や望ましい食習慣を身につけさせる。 ◇朝食を毎日食べて登校する生徒の割合を88%にする。	◇地場産物の食材を多く活用した「ふるさと食の日」を実施し、郷土を愛する心の育成につなげる。 ◇栄養教諭と学級担任による、効果的な朝食指導を行い、家庭への啓発を強化し、朝食に対する意識向上を図る。	B	◎各学年において計画的な食に関する指導ができた。 ▼朝食喫食率(11月調査)は、2年生が95%と非常に高いが、3年生の喫食率の低下(83%)が目立った。 ◎「ふるさと食の日」など年間計画に沿って食育を推進することができた。 ◎給食の残食がほとんどであった。 ◎食物アレルギー対策についても家庭との連携をしっかりと行い問題なく実施することができた。
	○開発的生徒指導	「自立登校」の奨励と実践	◇「自立登校」について理解し、実践できる生徒を80%以上にする。	◇「自立登校」を実践する意義について情報発信し、基本的な生活習慣の確立を進める。 ◇常に先を見通した行動を推進し、自分で判断して行動できる生徒の育成を図る。	B	◎保護者・職員のアンケートで自立登校についての評価は改善傾向にある。 ▼基本的な生活習慣(忘れ物・提出物・宿題・遅刻など)自立して自分でできていない生徒が増える傾向にある。	◎基本的な生活習慣の定着に向けて、粘り強く指導を続けていく必要がある。
		生徒会活動の活性化	◇学級生徒会・専門部委員会・代表委員会を完全実施する。	◇生徒会活動への積極的参加を生徒・職員に働きかける。	A	◎NAT(日本一アクティブな中学校)プロジェクトのもと、ボランティア活動を中心に活発な活動がなされ特に生徒会役員の成長を促すことができた。 ◎今年度のボランティアでは、生徒会役員だけでなく多くの生徒が参加できた。	◎生徒会の自主的なNATプロジェクト案を実現させていく。
		自己実現を育む生徒指導	◇「なりたい自分」をイメージできる生徒の割合を70%以上にする。	◇キャリアプラン作成を推進し、「なりたい自分」に向けて努力する姿勢を育てる。 ◇「学ぶこと」の意義について理解を深め、学力向上につなげる。	B	◎1年ライオンズクラブによる職業講話、2年職場体験学習、3年進路選択によって、自分の将来について考える機会が十分にもてた。 ▼生徒たちが、進路実現のために自覚をもって、生活の改善や学習・部活動の努力など、具体的に取り組んでいけるように仕組んでいく必要がある。	◎キャリア教育を更に系統立てて、見通しをもって進めていく必要がある。 ◎教職員のキャリア教育研修をすすめ、「基礎的・汎用的能力」への理解を深める。 ◎生徒の進路意識を継続させる指導や取組を試行し開発していく。

③ 「地域とともにある学校づくり」の推進 ～地域貢献活動(NATプロジェクト等)を通して～

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	開かれた学校づくりの推進 家庭や地域との連携	◇地域人材を活用した授業や行事を年1回以上実施する。 ◇情報公開を推進する。	◇地域人材を生かした授業の実践を、地域の有識者と連携しながら実施する。(道徳・学活・総合・進路指導等) ◇学校HPや配信メールにより常に新しい情報を豊富に提供する。 ◇学校たよりや学級たよりの定期的な発行を推進する。	B	◎学校ホームページのお知らせに前年度より多く情報をあげることができた。 ◎「はなまる連絡帳」を利用し、情報をタイムリーに発信することができた。 ◎地域人材を生かした学校行事が定着した。(職業講話・給食による地産地消・郷土料理教室など) ▼授業参観や学年PTAなどへの参加者が少なく、学校からの場が十分に伝えられていない。	◎学校ホームページにおいて、発信担当者を確認し、定期的な発信を継続する。 ◎管理職が中心となり、地区の各種団体とのコンタクトを積極的に取り、学校での行事への協力依頼を行っていく。
	○教職員の資質向上	教職員の指導力向上と服務規律遵守のための研修実施	◇研修会等への参加の推進を行う。 ◇校内研の推進により、学習指導力を向上させる。 ◇信用失墜行為の防止に関連した職員研修を充実させる。年2回以上実施する。	◇研修会や講座の情報発信を職員に積極的にいき、参加できるように校内の調整を行う。 ◇教職員1人年1回以上、研究授業を実施する。 ◇ハラスメント・飲酒運転などを防止するための研修会を実施する。	B	◎教職員1人年1回以上の研究授業を実施することができ、校内研究を充実させることができた。 ◎校内研修(人権・同和教育・特別支援教育・ハラスメント防止など)計画的に実施することができた。 ▼教科指導の研修への参加が増えてきたが、学級経営等の研修への参加を助めていき、学級経営力を身に付けていることができるようにする。	◎研究主任を中心として、従来までの授業研究会及び校内研修の継続し、改善を進めていく。 ◎研修会や講座の案内を「NEO」(校内情報ネットワーク)を使い、職員に確実に伝えるようにする。 ◎信用失墜行為は、無くて当然の事との意識を持ち、ことあるごとに職員への指導を継続していく。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	衛生管理の改善・充実 文書処理の校務サーバーの利用	◇「職員会議等の回数や時間が適切であり、円滑な運営ができています」と答える職員を90%以上にする。 ◇「早時退勤日に、17:30までに退勤できた」と答える職員を70%以上にする。 ◇「分掌の文書等を校務サーバーに保存し、活用することができた」と答える職員を90%にする。	◇全職員による職員会議の前に、事前に打ち合わせを行い、円滑な運営ができるようにする。 ◇毎週水曜日に部活動完全下校を16:30に設定し、早時退勤ができるような環境を整える。 ◇文書等の円滑な作成ができるように、校務サーバーへの文書の保管・利用の方法を再確認する。	A	◎職員会議の運営が円滑であると回答した職員は100%であり、円滑な運営ができていると言える。 ◎早時退勤日には、17:30分前に退勤できたとしている職員は79%であり、職員の意識が高くなっていると言える。 ◎文書等のデータの活用・保管に活用できている職員が90%を越え、文書等作成の効率化が図られている。	◎職員会議の運営、校務サーバーの利用は今年度の継続を図っていきたい。 ◎早時退勤日については、定着をきているものの、更に意識の向上を図り、仕事の効率化等をすすめ、早時退勤ができるような環境を整えていきたい。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

○ 研究授業の実践、ICT活用、食育、文書作成においてのサーバーの活用については、充実した取り組みができています。また、本年度から評価に加えた働きかた改革については、3つの点については、職員各々の高い評価が得られています。ただ、中には、時間外勤務の祖時間が長くなっている職員もおり、個別の対話が必要であると考えます。

○ 全体的に生徒による評価が高くなっている。このことは、生徒たちが学校生活において、それぞれの活動を認め自己肯定感が高まっているためではないかと推察できる。一方、職員による評価は、前年度より厳しい評価となっており、学校生活における生徒の活動に危機感を感じているように思われる。

○ 部活動の充実においては、高い評価が出ているが、前年度より、保護者や職員の評価は、低下している。生徒たちは、現在の活動で満足度が高くなっているが、大人から見た活動については、まだ、足りない部分があるのではないかと推察される。

○ 地域への働きかけを学校から行い、地域から生徒に対する様々な活動が多くみられた。しかしながら、家庭から学校に対する関わりが薄いように感じられる。数か月に1回の授業参観や学年PTA・PTA総会等への参加が著しく少ない。今年度は、学校HPやはなまる連絡帳を使って、広報活動を行ったが、さほど変化は無かった。来年度は、参加意識の改革をどのようにするかを模索していく必要があると考える。

●は共通評価項目、○は独自評価項目